

彙報

◎ 二〇二二年度大会（二〇二二年七月三一日）

コロナウイルス感染防止のため、大会はオンライン形式（Zoom）で開催されました。

【研究報告】

倉田 守「天保・弘化期における加賀藩の海防政策」

朝山 明彦「明代中期の関羽信仰―呂柟を中心に―」

鈴木 山海「一七世紀ドイツにおける帝国裁判権と学識者―ヘルマン・コンリング（一六〇六―一六八一年）の業績を中心に―」

心に―」

許 開軒「近世江戸における鳥類利用―市谷本村町遺跡・四谷一丁目遺跡出土動物骨の検討から―」

【講 演】

梅村 尚樹（東洋史学研究室）

「宋代士大夫研究の現状と史料の問題」

國木田 大（考古学研究室）

「自然科学で探る土器の発明とその使用法」

◎ 二〇二二年度総会（二〇二二年七月三一日）

大会に引き続き開催された総会で、北大史学会の委員・会計監査が以下のように選出されました。

【委 員】 小倉真紀子・梅村尚樹・長谷川貴彦・村田勝幸・國木田大・吉田拓矢・富士貴央・長瀬篤音・守屋豊人

【会計監査】 白木沢旭児

次に二〇二二年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認されました。

I. 収 入

前年度繰越金

一、〇〇二、三一七円

二〇二〇年度収入

五四四、〇〇四円

（内訳）

会費

五一一、〇〇〇円

広告代（北大出版会）

五、〇〇〇円

会誌販売代金

八、〇〇〇円

寄附金

二〇、〇〇〇円

銀行口座利息

四円

合計

一、五四六、三二一円

II. 支 出

二〇二〇年度支出

二四一、五一一円

（内訳）

『北大史学』六〇号・『史筵』一八号出版費用

（印刷代および振込手数料） 二〇七、九〇〇円

郵送費（『北大史学』・会費請求書等） 一七、〇四六円

交通費（『北大史学』発送時の駐車場代） 一、〇〇〇円

ホームページ用サーバーレンタル料	六、七六五円
事務費用（封筒印刷代）	八、八〇〇円
次年度繰越金	一、三〇四、八一〇円
合計	一、五四六、三二一円

◎ 二〇二〇年度卒業論文・修士論文発表会

(二〇二一年三月一日)

コロナウイルス感染防止のため、卒論・修論発表会はオンライン形式 (Zoom) で開催されました。

【卒業論文発表会】

- 佐藤みずき 「大正期外務省の「対外宣伝」」
 彦山 明志 「元朝初期における山東の投下領に関する一考察」
 林 康祐 「公民権運動以降の黒人文化をめぐるせめぎ合い—アルバート・マレーの著作を中心に—」

【修士論文発表会】

- 三浦 一将 「満洲事変と中国人有力者—張学良政権と中国東北在地社会—」
 西川 達 「初期ムスリム同胞団における不信仰論的特質—クトゥブとフダイビーの思想比較から—」
 高崎 洋希 「一九世紀ルイス島におけるハイランド・クリアランス—内部移住政策とその歴史的意義—」

◎ 二〇二〇年度博士論文・修士論文・学士論文題目

【日本史学研究室】

● 博士論文

- 相庭 達也 「明治期北海道における戦争と慰霊」
 北山 祥子 「建国神話の政治学—檀君神話を中心に—」
 木村 聡 「連合艦隊論」
 鈴木 仁 「樺太における郷土文化の形成と展開」
 孫 雨涵 「在奉天総領事から見た土地商租権問題—榭原農場事件を中心に—」
 楊 茜 「対華21カ条をめぐる中日両国の交渉—山東問題を中心に—」

● 修士論文

- 五十嵐諒子 「丸山遊女と「唐人阿蘭陀人」の子ども」
 伊 伊 「日中戦争期における華中占領地の食糧問題」
 亀田 侑美 「幕末期における内海船の買積経営」
 菊地 良介 「古代中世の音楽官司別当職」
 邱 士懿 「『台湾新民報』の言論傾向に関する研究」
 橘 宏 「明治時代の伝統仏教」
 細井 史 「本田勝一の「民族」と「愛国」」
 松野 宏樹 「中世における土地相博とその機能」
 三浦 一将 「満洲事変と中国人有力者」
 森 奎介 「永祿年間末期における上杉氏の対外交渉と軍事行動」
 吉田 朋生 「安永・天明期における松前藩主直轄領と場所請負制」
- 学士論文
- 井川 森実 「中世密懐法の考察」
 小澤 宏太 「本所七不思議考」
 近藤 慧和 「日本古代における陸位制について」
 佐賀 健 「兵士と営倉」
 佐藤みずき 「大正期外務省の「対外宣伝」」
 鈴木 慎雅 「有徳銭の歴史的位置付けについて」

高橋 弥琴「日本古代における律令制と祭祀」

武田 典子「日本古代における女性官人」

長谷川拓馬「藤原京の造営」

松下 壮哉「戦前期外務省における官僚制の展開」

山内 陸矢「日中戦後の中国残留日本人」

【東洋史学研究室】

● 修士論文

岸 佑香「漢初淮南国と淮南王黥布の挙兵」

西川 達「初期ムスリム同胞団における不信仰論的特質——ク

トゥブとフダイビーの思想比較から——」

西嶋 尚義「アンダルの占星術師像——九—一〇世紀の人物を中

心に——」

町田 太志「前秦政権における羌族の位置づけ」

松本啓太郎「辺疆学者黄奮生と中国国民政府の辺疆政策」

● 学士論文

水谷柚香子「ウル第三王朝ドレヘム文書から見る熊について」

出野 格「一九三六年紅軍西征期の民族政策」

竹淵 啓祐「東省特別区に於ける中東鉄道権益回収運動」

彦山 明志「元朝初期における山東の投下領に関する一考察」

安藤 貴堯「領域国家期のシユメル都市国家アダブにおける対外

交流」

望月万梨乃「初期イスラム時代の女性表象——タヌーヒー（九九四

年没）著『座談の粹』の分析を通じて——」

【西洋史学研究室】

● 修士論文

且尾 尚功「中世南フランスのカタリ派の共同体——Les femmes cathares」を讀んで——」

清水 康宏「一六五〇年代のカタリニャ公国とスペイン王権」

鈴木 亮佑「ドイツ国王ハインリヒ（七世）の王国統治——ネット

ワーク分析による再考——」

高崎 洋希「一九世紀ルイス島におけるハイランド・クリアランス

——内部移住政策とその歴史的意義——」

沼前広一郎「芸術家による第一次世界大戦の表象——ジャン・ミエ

ル・ラブルールの場合——」

● 学士論文

岡本 稜大「ユーゴスラビア内戦時のボスニアにおけるナシヨナリ

ズムの引力」

菅野あかね「ポリシェヴィキが革命祝祭に込めた意図とその成否」

白木 憲治「ローマ帝政期小アジアにおける恵与（エヴェルジェ

ティズム）」

甲斐あかね「中世ヨーロッパの魚食文化」

小林 祐介「ドムス・アウグスタとアウグストゥスの後継者戦略」

林 康祐「公民権運動後のアメリカにおける黒人文化をめぐるせ

めぎ合い」

佐々木拓也「一四世紀以降のベスト流行が引き起こしたヨーロッパ

における社会的影響について」

岩永 海澄「古代ローマの属州ヒスパニアにおける皇帝崇拜——エミ

リタとコロドゥバの事例から——」

大石 実和「ポストフェミニズムの女性表象」

佐藤 裕季「アウグストゥス帝の社会立法からみた古代ローマの女

性像——」

太田 早織「産業革命期イギリスにおける知識と制度」

東川 清虎「フランスにおける死刑制度の廃止」

齋藤 拓海「スペイン風邪をめぐる表象―風刺画を題材にして―」

山本壮一郎「産業革命期イギリス労働者のアイデンティティー―自叙伝を素材として―」

土屋 輝「一九世紀のウイーンにおける音楽文化と施設」

三浦 桃佳「古代ローマの食料供給政策」

渡部 春妃「一九世紀ロシア帝国における高等教育と女性たち」

【考古学研究室】

● 学士論文

中村 冬吾「北海道豊浦町礼文華道跡における石器の研究」

永野 遼太「縄文時代における堅果食の研究」

溝尻 拓郎「縄文後晩期における東部瀬戸内の植物利用の変遷」

大野 彩花「縄文文化における貝刃について」

◎ 研究室便り

◎ 研究室便り

〈日本史学研究室〉

今年度の日本史学研究室は、教員六名、共同研究員三名、専門研究員六名、博士後期課程七名、修士課程九名、学部生五四名、大学院研究生一名で構成されています（十月一日現在）。博士後期課程・修士課程の入学者は計四名ですが、留学生が多かった近年の傾向とは大きく異なり、全て国内の学生です。これは、新型コロナウイルス感染症の流行により、大学院入学を目指す海外からの研究生の受け入れが困難になったことが影響した結果と思われる。

新たに研究室の一員となった学部二年生は一九名です。本研究室では、毎年夏季休業期間中に学部二年生を対象とした研修旅行を実

施していますが、こちらも感染症流行の影響を受け、昨年度に続き今年度も中止となりました。研修旅行は、史跡を訪れ、また文化財を間近に見るといふ体験を通して、日本史研究の素材である史料が現在まで遺されていることの貴重さを学ぶと共に、本をめぐるだけでは得られない実感を伴った理解を深める機会となっていますので、来年度以降に延期するという形で、在学中に一度はぜひ参加してもらいたいと願っています。

授業に関しては、昨年に比べ教員も学生もオンライン形式に慣れてきました。場所を選ばず授業が行えることに利点を見出す向きもありますが、かつて大学という「場」で自分がいかに多くのことを学んだか、と往時を懐かしく思う教員にとっては、教室で行う対面形式の授業が減ったために共用研究室に足を運ぶ学生が著しく少なくなることが極めて残念に感じられます。学生の談笑が絶えない賑やかな研究室、というのが、まるで過去の幻のようです。

なお、本研究室の運営に尽力してくださった事務補助員の川本愛さんが退職されました。後任として、戸澤里美さんを新しくお迎えしています。教員・学生共にお世話になった川本さんに、この場を借りて心よりお礼を申し上げたいと思います。（小倉真紀子）

〈東洋史学研究室〉

本年十月現在、東洋史学研究室は、教員三名、大学院博士課程五名、修士課程二年生二名、一年生三名、学部四年生七名、三年生四名、二年生三名に加え、学術振興会特別研究員一名の計二十八名で構成されている。

昨年初頭頃から猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の流行は、この一年間も収まる兆しを見せず、むしろさらにその脅威を増す結果となった。授業をはじめ大学や研究室で行われる様々な活動

も引き続き強い制約を受け、平常を取り戻す見通しは全くたっていない。

とは言え、当初は右往左往、あるいは終息を期待しての様子見であった我々も、急速にこの状況に適応し、少なくとも表面上はほぼ全ての業務や活動を、オンラインで滞りなく行えるまでになった。例えば本研究室の重要な活動である「東洋史談話会」も、昨年十月に再開することができ、今年の六月・八月にも行って、従来通りの定期的な開催に近づきつつある。また卒論・修論構想発表会や、一年生を対象とした研究室説明会なども、回を重ねるごとにスムーズに進められるようになってきた。また長らく停止されていた海外への留学も、博士課程在籍の高橋稜史さんがスペインへ渡るなど、世界的に見ても状況は改善されつつある。

「東洋史談話会」の運営は大学院生が主体であるし、他の各種行事も大学院生らの力に負うところが大きい。昨年は新たな状況への対応に追われ、研究室を維持運営していくにも細かな部分で混乱をきたしがちであったが、今年に入ってからには院生・学生が主体的に立て直しに尽力してくれたおかげで、徐々に研究室らしさが戻ってきたように感じられる。

一方で、かつては頻繁に行われていた懇親会などは、いまだほぼ皆無である。今年の八月にはオンラインでの懇親会を初めて試み、メンバー同士の親睦を深める機会を持ったが、これまで研究室に馴染む機会に恵まれなかった学部生などにとっては、なかなか打ち解けづらいものだったと思われる。とくに三年生以下は、これまで学生生活のほとんどがオンラインで進行し、大学や研究室の持つ重要な要素をあまり経験できないままである。研究室にとっても、世代による分断などが将来危惧される状況にあり、コロナの終息を祈りつつも、今後の対策を考える必要があるだろう。(文責：梅村)

〈西洋史学研究室〉

二〇二二年(令和三年)度の西洋史学研究室では、九月末の時点で、二年生が一四名、三年生が一四名、卒論提出年次生が一八名、修士課程に四名、博士課程に二名、専門研究員が三名という状況になっており、大きな変化はありません。教員は、砂田徹、山本文彦、長谷川貴彦、村田勝幸、松嶋明男の五名が、それぞれ教育と研究にあたっています。また山本文彦教授が、理事・副学長として大学の執行部に加わり、ご尽力をなされています。

昨年来の新型コロナウイルス感染症の影響は、西洋史学研究室においても、甚大なものがありました。オンラインでの会議が主流となり、なんとか基本的な授業や行事などはこなしておりますが、研究室に立ち入ることもままならず、日常的な交流も難しくなっております。一日も早い日常への復帰が望まれるところです。

この間の研究成果としては、長谷川貴彦ほか編『生きること』の問い方(日本経済評論社)が「北大文学部刊行助成」によって、また専門研究員の田村理著『人権論の光と影 環大西洋革命期リヴァールの奴隷解放論争』(北海道大学出版会)が「文学研究院論文叢書」として、それぞれ本年度中に刊行されることになっております。

最後に、旧西洋史学講座名誉教授で、ドイツ中世史が専門の木村豊先生が、二〇二二年二月にご逝去なされました。謹んでお悔やみを申し上げます。(長谷川貴彦)

〈考古学研究室〉

二〇二〇年度の考古学研究室の構成員は、教員三名、博士後期課程二名、修士課程二名、学部生一四名の計二二名です。考古学研究室の新たな教員として、年代測定や同位体分析が専門の國木田大先

生をお迎えすることができました。あらたに導入した「考古調査士」の資格課程の運営を担っていただくとともに、研究室の学際化にも大いに貢献いただけるものと期待しています。学院化によって動物考古学や考古科学の専門分野が強化され、研究室の特徴がより明確になってきております。この影響は大学院生の質や数にも反映されつつあると感じていますが、さらなる情報発信のため研究室のツイッターも開始しました(@hokudaiakouko)。

新型コロナウイルスの影響は依然として続いています。昨年大幅に規模を縮小せざるをえなかった豊浦町礼文華遺跡発掘調査(第十回)は、対策を講じたうえでなんと通常規模での実施にこぎつけました(二〇二一年八月三日〜九月三日)。二年続けて野外実習がまともにはできないと学生にとっても大きな痛手であっただけに、安堵しています。しかし、同じ場所で行っている一般教育演習(フレッシユマンセミナー)、全学教育「フィールド体験型プログラム」は中止となり、現地説明会や礼文華小学校児童の体験発掘など地元の方々との交流も残念ながらすべて見合わせざるをえませんでした。厳しい状況のなか、実習を受け入れていただいた豊浦町教育委員会・豊浦町役場、およびご協力いただきました豊浦町郷土研究会・礼文華地区の方々にあつく御礼申し上げます。

小杉教授は、引き続き北海道大学埋蔵文化財調査センター長を兼務しました。また、鷹山遺跡群星葉峠黒曜石採掘址(長野県)保存整備委員会委員、キウス周堤群(千歳市)保存整備委員会委員長、垣ノ島遺跡(函館市)保存整備委員会委員、鷺ノ木遺跡(森町)保存整備委員会委員として各委員会に出席しました。委員としてかかわった鷹山遺跡群「黒曜石鉱山展示室 星くそ館」が令和三年七月二〇日にオープンしました。「史跡垣ノ島遺跡」の整備も完了し、令和三年七月二八日に一般公開を開始しました。キウス、垣

ノ島、鷺ノ木の各遺跡は七月に世界文化遺産登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産、関連資産です。令和三年度北海道大学公開講座(全学企画)「備える・ウィズコロナの時代をどう生きるか」(七月)第八回発表、放送大学面接授業「縄文土器・土偶を読み、解く」(六月)を担当しました。奄美大島・喜界島で民俗誌考古学のフィールド調査を実施しました(三月)。

高瀬教授(二〇二一年度昇任)は北海道出土の動物遺体に光をあてた科研費(基盤B)のプロジェクトを開始しましたが、北海道内の出張すらままならない状況のなか大幅な変更を余儀なくされました。教育面では、カナダのトロント大学と相互に訪問しあう共同授業(サマインステイテュート、ラーニングサテライト)もすべて中止となりました。カナダ入国時の規制は緩んではいますが、日本に帰国した際の自己隔離期間が入試など重要行事にかさなることがネックになっています。外国人の入国もまだ「特段の事情」がある場合しか認められておらず、長期で来日予定だった海外からの研究者の受け入れも延期および中止となりました。国をまたいだ教育プログラムや共同研究にとっては、深刻なダメージがはじめています。

國木田准教授は、昨年度から「土器の年代と使用法の化学的解明」(学術変革領域A)の研究プロジェクトをおこなっています。この研究は、「土器を掘る」22世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究」をスローガンに進めており、今後研究室の学生にも大きな刺激になることを願っています。

今年の考古学研究室からは学部生四名が巣立ち、それぞれ希望の進路へと進みました。大学院進学者はおりませんでした。一名が博物館に勤務しましたので大学での経験をいかしてくれることを期待しています。

